規

石兮

清談常磐色香（せいだんときわのいろか）

柳亭種彦閲
春田芝亭作

壱

へ13
3583
1

婦人文章

大全計利宝

しなやかなる女日用の文章をあつめ、そのかぎりなれば、
又いなかの花柳の秘伝、かきびいのび、ゆずりの手あつかひ
那向病のめ薬であらど、那他人の教えおほのんだ、
男女のおれそれと新の仕振、婚礼風俗まで委しく
載じて女の用ひるを除さず、ひろきをうる

○ 夫文面は無事をもととす、おろそかに
婦人は幼より、彷徒のつぐふ、迷きを、
年久しくなるまで、嫁入のとき、山本を付さ、名ふ
入もきのあ、文ふ分りて、行るもつる合、世風の
ひそ宝ふ、

へ 13
3583
1

早稲田大学図書館
35.2.2
蔵

互校目次并崖畧

心の色

いろはにほへとの四十七字。並様おて一字千金。たぐあくろといふ一句の講釋。古文前集の一龍一豬を。踏へて書くる。假字物語九發端

犬櫻

肌の雪ふ狂ひつ。尾をふる里の犬
達へ薄情あるハ。犬とよのふ櫻ふて。
花ふまがふくいせもの。日本の司馬
相如が。琴心あちね三絃の二上り

戀の闇路

招うねふ悋とする扇の恋風地紙の
色の紫よりとさわ易い春の夜れ逢
瀬ま。あろうと寝と横の巻より縦
筋へうつる。御幸町の夢れ塾

ひとがのこ

ぎでもあれ薬さうとの蔓ふ生つこ。
茄子でふあ〜ていわざらけ。菊石顔の
化粧責わ。紅皿缺皿の噺ふもきろね。
新手ある継子いびと

三の徳行

泉水での濡衣ハ中將姫わ赤
脚の抜足。外へふと出すお光ず
大膳の根ざ〜わ。小耳ふ挾ミ
〜水橋ぶ行狀

常磐色香一之巻 一名本朝奈何天

江戸柳亭種彦閲　厚田笠亭仙果戯作

心の色

春の長日の未過る頃。欠伸しつゝ西の窓より障子開けて。人の往来を見る程。雅き比丘尼。赤き紐つけたる笠被て。かハゆちゝ様にて。向の果うる家の軒ゝたち。勧進あるゝ。物こひつゝ様ぶるゝ腰かけたる若人ゝ。

哥うゝうゝ。銭多くやらんと笑ひつゝくべ。耻るけゝ
れもあゝ
梅ハ香よ櫻ハ色よ。人ハみやうたぐ心と調子高う
ぞ唄ひりゝかゝるこゞひの者どもゞ轉ぶもゝ。つゞまり
もさとある。俗間のうゝひりのあどハ耳ふもかけぬえせ物
識もあるとどそハ中くふ思慮淺きなり。法瑠璃說經の
たぐひふも。折々千金の格言ありて。教誨ふある哀あた
ゝもあらゞ。此歌あどよく嚙ゑて味ふべゝ。抑

人ゝとして容貌の美醜あるを願ハぬ者やあるべき。心とそ
も曲ゝとゝ。あゝかゝとゝやハあのふべき。然れどゝ直
らぬさがゝかゝちゝよりゝ。上ふもよるゝと作ゝと直る
心ハ私意ふ押まそ。あゝきをあゝとゝらぬうらふうハべ
の花れゝ。ぞうたゞ。八重山吹の實あるハあゝ。唯色とのゝ
先ゝとゝて。そゝゝゝ仕入のたゞりのハ容通あゝる男より
たようて。高貴のお部屋と威をふゝひ。女も視百貫ふ
て。支度金もてゝゝえをゝり。鍬柄だちのあゝりゝおゞ

の左右手ふ團扇を握らせる事今時ハ珍しからず。
そもそも又。うろくしきぞたぞ。たぞぞあぞ。あぞぞうハ
のいぞら風と流行ゆくもそぐハいろあるさるふあり。
くらんず〜てふるゆよりハ新しきを好むらふ秋ふ
まぞあふ祇王祇女盛の色もさのまれ〳〵色衰るふハ
とりてハ。関寺の小野ハ小町皆の衣をかさと人もあ〜。
さるべきあぞらくの顔色を悔ふ終ふあるあハせよき支
ありとも。拍子ふ乗こる浮雲ハ踏たぞを支目前あり

いでや拙を守て分をあて。万能よりも一心と道とを
しくの剃磨きふかゝちふ人て心をあるまゞ。心の色ハ
老朽てもうろ〳〵容貌のあらぞ。支智伎藝のそぐ
れとるも又あぞ〜く多くはつ〜〜淺く心あおりて。徳
を脩るかゝ等閑ゆそ人の孫〜〜さ入うけ。身をあやまろ
支まくあらぞ。かゝて手筒ふ不男ふ流行かゝれとふ
様ある人ハ徳もそあらて世の用ひあて〜。家国をもよく
治るりのあり。あくの意を二句ふこめて　人ハこゝやよりたぐ

心とゝ人る。周公孔子も。實々とうあづきをふべし。あまの
ぎやくも爭ひえず。あの一句を物に書き。床にかけて常
に味ひ。我を省み人に交るべし。妻子臣妾を使ふも擇
ぶも。皆此心得をもとゝべ。德は本也智は末にあらず。
用ひ誤る事あらじ。あらのゝあらまほど此一句は醜き女
手筒の男れ脅閊をひらく。又志を立る基にもあるべし。十二言の文字あづかり。かく並れば一字百万両の
金言とゞあるとふけるゝ。さまざまとそ心ゝ真の道に叶ひあべ。醜てもオ智あくても恥べきにあらざるもまこと
真の道にかなる子。色も香も捨べく嫌べきにあらざる色
や香は次にして心を先にせよくゝ〇夫に物語あり。
地方に定かなるべき城下にやゝ生を傳る御むすめどもうて
同じくわどの身柄にて相應にあらざり商屋に形ありゝ女子にて
もとう東のと於ちう。西れをかなへとゞまびくるもまこいにあらざる
王の如く花の如き上髪化粧のあらひと凝り。琴三味線
も拙かるべ評判の女兒。もろくまこやうらくとゝ

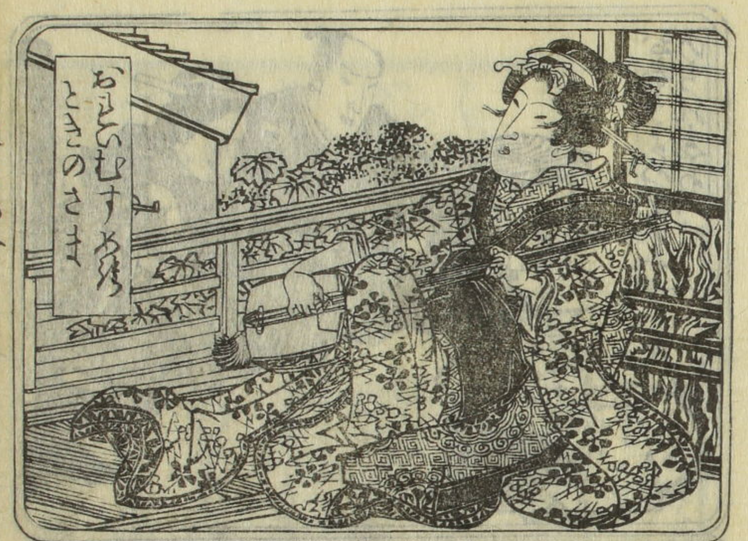
お福の面も色白くあそあるを肌へ鼠色ふて猫背へ目
口のつけ所あどへ。あこふいろも違ふ。よりどむつかしく代
物あるべ。自もいつくたぢ。剃磨も心ふひまべ。たゞ深窓ふ
ありて織縫ふ精さゞて。月日をおくりければ。稚き折ふ
そ。おとゝふも膝を接へ五ッ石十六むさ〜さむつび〜かゝ十
さあくてはまだあきやうにあと行て。おとゝもかゝる醜婦
と立並ぶんあと。外聞あ〜とそ。おのづから疎遠ふあるとて。
むうくどもこのやうもあらず。かくてと〜頃ふありりるを

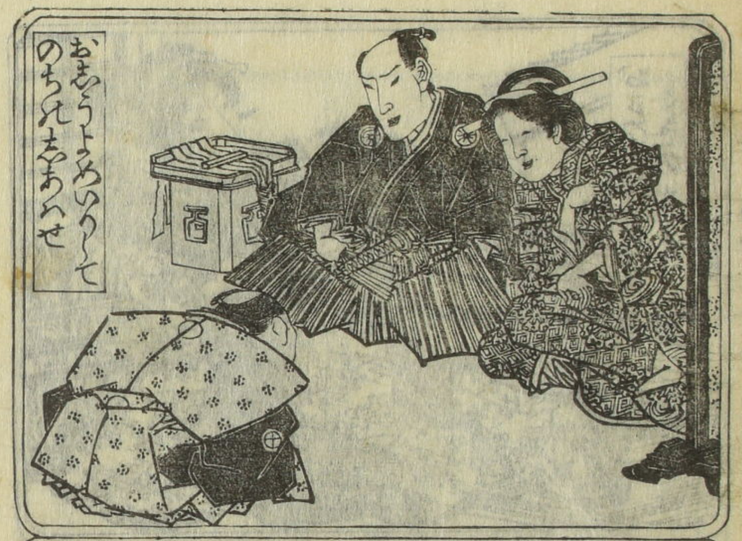
西へ媒の市をあせど。望大きく〜て容易ふ許さべ。東へ持
参を山とつゝ。好こゝとてもありるとど惜あ〜縁とふ〜て。
互ふ北だうとふありね。頃へ應永年中の夏あれべよのあ
う甚穏あらべ。さるあどふ都とても騒がし〜在郷ふへ
やゝもまるべ一揆をあると。市町も強盗横行〜寶を奪ふ
のゝあらべ。加賀よりの紀婦をかどひあどし〜ゝとりるを一日此
あゝろへも盗人入て。だまくおあうおとん孫〜う同道〜
て物詰せ〜かゝるさを。並木の陰よりうるふかゝる世ふ。

身を飾ることなれば。紫綸縮の小袖に。緋の唐繻子の表まはしきを畫夜ともなくする帶を結び。えもいはぬ白雪かはの擬たちまちびらる深山木にもとより恋なるなることを好るがゆゑなるらねば世を憚てのやぐ麻服の目ぐるをさる。奉書のひきまぜられたちひさく島田をやはへるのさまれば美しきに倍美しくて。醜きに一きはこまふとく肥太て重げなるおもうに。被ぐるを太儀と見るのこゝろて手もかけぐるからちまきうふて。軽くやらびるお

ぶいとよりにまろりのといふよりえやく。盗人にかいつろこ。そのまくうえびぎりふろと。おもうもの〜ひぶふきをもうを掩んとよりとるひふまを竭〜ぎべ。錯てかどう〜もとべく。又櫛釵衣服をど。あれざふとて剥ものべ〜今度の危難のがをつるへあばをさいひのぶとくあるど其ぞもちのよきふよをうおもう。此上ふ幸をど得ぞりる。此ゆど国の守より貪民の塗炭ふくるーむをあんをこ米穀あまをこ施しゆひりるを。此おもうぶ家廣くてもりへひ

も雜穀をあき方へ便よ〳〵とて。此こせを此あこう人の御施行の場と定め。役人衆あつ〳〵来て。日數の間滯留あつまひろう。奉行衣々ふ御方へ。とあいちこの盛拳思ひ企夏人る御方ふて歳ごろけまごも。群を抽出て。德高比君子くりつひるの間へ。物いふ暇もあつて。夜へつとくゝみて持參あつりる二三冊の物は本ゆよく飽るひはこべ三三ふ。何ど藏せる書物あらべかせよとん夏人べやゞて說郛といふ唐本の内の一帙袖中抄故夏談あど。とりあつめちひづかく





る商人ふい似げあ〳〵も貯へたる哉とやか〳〵。うち見めて
や〳〵かど。所々聞書まする批評など書添こるゞ見識高
し。手もあ〳〵かちゞ。誰ぞわざごとのふみさとあかちかあう
ゞ徒然のあいざこ。醜婦おこをあま。縫物い落くぶの君も及
べ〳〵。機かるうぶゞい。董永ゞ妻もかくこりんとおりいるくまぐ
あるうへ。かく書よむ支を睹ゞさる艸帝物語いかこちち
みて。漢の和れ経史どもさゝ。大うこゝあきらやよく義
理ふ通ゞうゞ。さるゞ物をこる顔もせゞ父もちる者

みて。娘ゞ器用さかあらんべかゝる奇女ともあるを人あるを
りるを。此御方。此書物より心揺き。あとり近き者ゝ支
ふふるとて。おあうゞ平生ときくゝみ。行厚くやちゝこふて。
婦徳備れて。されゞ或時。学問藝きを賞てやゝて風流
ある詩を作て贈てをふふおゝいてきて祝んおろゝ
よゝたるのゝ。和顔ゝて席上ふきをあり。各と賣んと
する女あどふいあらゞ。かやうの女二人とあらゞ。二満三
平厭ふべきふあらゞとて。媒をもて尤うけあひられべ。

かちまち大家の奥様とあるとふりり。此御方。をひく高
職ふ昇て。中年ふゝて国守の客分とまであるとのふ。
是てのゝちの正ゝ況故よき人ふ思れて。よき幸を
得ゝるゝ。をるんあるとあれ。かゞゝさをてより多く
のあらくゝを男ふあゞくさまを。さて三国をやらん下の関
とやらん遠き湊の遊女とあり。富貴の家ふうけ出さ
るゝ幸もあゝ。年おきて後。飛鳥川をと身の上れ
粋方の妾とあり。本妻の嫉ゝふ苦ゝゝ果いをとふ

もあるを。涙いろも淵をあ〜。うゐむせさらふあること
〜こあん。ををこい美麗の麗の文字。かあうハ醜悪の
醜の文字ふあこれるものを。〜と思ひ〜を。今よりして
あをと見をべ。をこい零々落の零。あうハ秀々出の秀く
ろ。さをべ色ある人も色よりかありて。かもハね災ふ
罹るもさべ〜。葦屋の里れ妻を争ひ。真間の手古名の
故事も同じ。色ある人の徳あきハ金銀を藏むる庫
の扉ふ鍵をきくねゞ如〜あり。いざやきび〜く心の鍵を

さ〜〜かこあて。色をたのまゞ色を誇らゞ。色ハ災をます
〜事ある物とあるべ〜。金銀ハ勘定ゆ〜つるふ物ふあ
らゞ。色ハつきまへあ〜ちでよろあぶ物ふあちゞとあん
此一回ゆ。發端ふて。色を悪き嫌ふは非ふ〜て。色ハ
悦ぶべ〜て。懼るべき説をある〜こと。二回目より
へ。一つゞきの物語ふて。大意ハ此条と同じ〜けれゞ
別の物語く

常磐色香一冊